

“UNESCO symposia series on the future  
of education for sustainable development  
in Omori” に参加して

NPO 里海づくり研究会議 田中丈裕

1. 大森の皆さんのお話から得られた key word :

復古創新／古き良きものと新しいものとの共存／life cycle をデザインする／関わったみんなの幸せを考える生き方／利益を生み出すためではなく持続するための経営／生きる力を備えた子の育て方／仕事に追われ暮らしのない日常から暮らしながら働ける日常へ→人間の再生／都会的な要素と田舎的要素のバランスの良い組合せ／古いものだけにとらわれず便利さを容認しながらバランスを維持する／教育とは過去と現在と未来を比較しながら知恵を教えること／大きなひとつの会社で支えられている地域より小さな様々な会社で構成される多様性の高い地域の方が持続的／”think” 考える学習←→active learning／IT 技術の重要性を認識することは不可欠／子ども達と社会との繋がり方を考える／子どもは地域の宝／世界遺産は観光地ではなくユネスコ憲章の精神を伝える場

2. 大森のこれからは？

大森で暮らす人々からお聞きした貴重なお話の中で、印象に残ったフレーズを key word として上述してみました。この中から見えたのは、大森に住む人達の郷土愛、郷土の歴史と文化への誇りです。そして、現在の大森の人達の暮らしを支えているのは、中村俊郎さんと松場大吉・登美さんご夫妻という三人の巨人・・・というのが実態でしょう。中村さんは義肢装具の製造・適合業務を営む中村プレイス(株)の経営者、松場さんご夫妻は石見銀山生活文化研究所・群言堂の経営者で、アパレルと古民家を活用した旅館業を営まれています。世界遺産に認定された時には、これからの未来に大きな可能性と夢が膨らみ、多くの人々が利益を求めて押し寄せ、数年を経てブームが去って次々に撤退されたとのことでしたが、この三人の巨人が居なければ、この時点で大きなダメージのみが残され悲劇的な結末を迎えていたことでしょう。そうはならず、I ターンの参入者も加わり今では約 50 人もの 20 代、30 代の人達が定住し、子ども達が増えている事実は、紛れもなく新しい未来が芽吹いているということです。こうなった最も大きな基盤は生活を続けていくための仕事があること、暮らしながら働く場があることです。そして、良い方向に修正できた最大の要因は、保育園児が 2 人になり保育園や小学校の存続が危ぶまれ、最も危機的な状況に陥ったときに、中村さんの支えはもとより地域がひとつになって守り通したことでしょう。一人暮らしのおばあちゃんまでが寄付してくれたとの話が印象的でした。

しかし、これからはどうなっていくでしょう。中村さんも、松場さんもいつまでも現役で活躍できるわけではありません。また、どちらかが何らかの要因で経営が厳しくなれば、

たちまちに暮らしの基盤は揺らいでしまいます。また、世界遺産に関わる補助金に依存する体質になってしまえば未来はありません。これから、若い世代の人達が三人の巨人が創ってくれた器だけに甘んじることなく、働く場の多様化（IT の活用、ドイツ・オーストリア等に学ぶ林業など）とエネルギー源の自給体制の構築（岡山県真庭市に学ぶ森林資源の活用など）がまずは成すべきことでしょう。そのうえで観光地ではなく学舎として人が訪れる自立した世界遺産の地となることを期待します。これらのことについても、4人目のお子さんを宿された松場さんの娘さんの言葉「私達の子ども達には一度は外に出て真の大森の良さが理解できるようになって欲しい。そして、子ども達がいつでも大森に戻って来られるように、私たち若い世代が生活の基盤をつくり守っていくことに大きな責任を感じている。」、そのご主人の「若い人達が定住できる地域、子ども達をしっかりと育てることができる地域づくりを目指したい。その新たな一歩として真庭市のバイオマスを活用したエネルギー自給体制を勉強したい。」という言葉に大きなポテンシャルを感じました。

### 3. “ESD” とは？

**Sustainable Development** とは、“人と自然の共生”が大前提でしょう。私は、“共存”ではなく“共生”を目指すべきだと思っています。

「里山」、「里海」という概念は、社会生態系バランス（Socio-Ecological Balance）を持続的に保持するための優れたエコシステムアプローチ（Ecosystem Approach）の戦略といえます。そして、それぞれの地域で人々が生きていくのに最も重要なのは、それぞれの場所、場所で積み重ねられた経験とそこに生きる人達の環境への深い理解と情熱であり、「里海」や「里山」の資源・資本とは「人」そのものです。

私は、これまで主に岡山県沿岸部の「里海」と「まち」で漁師達とともに現場活動してきましたが、その中でも全国的に見て「里海」のトップランナーと言われる備前市日生（ひなせ）という地域と大森に多くの共通点を見いだすことができました。①大人達も子ども達も自分が暮らす郷土が大好きである、②大人同士、地域の人達の仲が良く信頼関係が醸成されている、③大人の誇りが子ども達に伝わり、子ども達の思いが大人にフィードバックして良い意味での世代間での意識の循環が生まれている、④子ども達が元気である、⑤若い人が多く、持続していくポテンシャルが高い、⑥地域内外の大人にとっても、子ども達にとっても学びの場になっている、などです。

特に、⑥については、日生においては発展的に継続されており、日生中学校3学年約200名の生徒達は日生町漁協の漁師達と協働してアマモ場再生活動に熱心に取り組み、カキ養殖体験漁業とともにカリキュラムとして“総合的な学習の時間”の柱になっています。今では、つぼ網体験漁業などと併せ、岡山市など「まち」の一般市民、真庭市や鏡野町など「里山」の人達、全国各地の大学生など幅広い交流が深まり、ここ日生の地は海洋教育を通じての学校教育、生涯学習の場となっています。さらに、これら30年以上に及ぶ日生の漁師たちの地道な里海づくり活動は、アマモ場の回復を達成するとともに、多くの人に感

銘と感動を与え、岡山市の小串漁業協同組合と小串小学校、「里山」の西粟倉小学校が協働してのアマモ場再活動や海浜清掃、岡山県西端に位置する笠岡市の二つの漁業協同組合と笠岡工業高校、地元市民団体、地元小学校が連携してのアマモ場再活動や海ごみ回収活動へと拡がりを見せ、今年からは、新たに日生西小学校や岡山市の学芸館高校など新たな参加要望が相次いでいます。

これは、日生において小・中学生、高校生・大学生から大人まで様々な人たちが世代を超えて立場を越え、地域を越えて里海づくりに取り組んだ成果であり、その波及効果に他ならないと思っています。これらの活動に1度でも参加した多くの人達は、「一生忘れられない体験をしました。また、是非とも参加したいです。」と言ってくれます。自然とのふれあい、自然の中での実体験が如何に大切かを現しています。そして、来年からは日本財団・笹川平和財団海洋政策研究所・東京大学海洋アライアンスのご指導、ご協力を得てパイオニアスクール制度を活用し、子供から大人まで世代と地域のつながりを広げ、「里海」と「里山」と「まち」をつなぐ新たなステップに踏み出すべく、今、準備を進めているところです。

“ESD”とは「教育」というよりも、大人から子供たちへ、先輩から後輩へ、先人や先輩の知恵を伝え、子供たちから大人へ新鮮な感覚や発想を返し、互いに学び考える「時」と「場」を提供することではないでしょうか。